Haru no yo no, yami wa aya nashi, ume no hana ;
iro koso miye ne, ka ya wa kaga ruru. （下に譯あり）

女學雜誌第拾五號目次

社說○母親の心得○愛育と云ふ事（其二）○惡行を防ぐの論●新報○數件●文學○つれ〲草の諸評○大和歌詞（ろ）（は）○帝号の讀例●佳傳○心のいもせ（天）附圖○婦人羅馬の滅亡を濟へる事○烈婦假名畧頌 ●叢話○日本古代女流の風俗（三）○假名のよ○俳諧の話○ したひも○うちかけ●寄書○ 世ノ姉妹ニ告ゲマツル●問答○香の物の答●諸廣告

二月十五日

はるのよのやみはあやなしうめのはな
いろこそみえねかやはかゝるゝ

●婦人六德（司馬溫公家範）

●○柔順○ 柔順とは物やわらかにして慈善ふかく父母に順ひつかふまつりて能く其力を盡すを云ふ也

●○淸潔○ 淸潔とは穢れしき事を心に受いれず邪なる事を思はず貞節を堅く執守るを云ふなり

●○不妬○ 不妬とは夫に順ひて背き悖る事なく我身を正しくして人を憐みたとひ夫の愛する妾ありとも夫をうらみ妬まず恨み怒る心なきを云ふ

●○儉約○ 儉約とは我心を堅くひきしめ少しも奢る心なく衣服飮食万事恣にきまゝなる事をせぬを云ふなり

●○恭謹○ 恭謹とは容正しく心を用ゆる事油斷なく身を大切に執り守るを云ふ

●○勤勞○ 勤勞とは人の婦となりては我身を夫に任せて少しも私の心なく如何やうの苦勞なる事も苦勞と思はず力を盡し勤むると云ふなり

女學雜誌第拾五號（明治十九年二月十五日）

●社説

○母親の心得。愛育と云ふ事　（其二）

万事に子供の友となりて心限り之を愛するをもて愛育の趣旨と為す而してかく愛育するの間ゞに於て之を教ゆるの工夫ありとは抑も如何なることか或人は斯く斗り表に現はして子供を愛しなば子供は母の緩やかなるに慣れて之を懼るゝの念なく其の教を受る覺悟全く失するに至らんと心配するもあらんと雖も此れ大なる誤なり若しも吾人が前に述べたる如くにして所云る愛育の道を行ひ其の子供を出來べき丈け愛し慈しみなば子供も亦た心限り母になづきてたゞ其の愛を失はざらんことを念ずるのみならず万一母の待遇の少かにても前日と異りたらんには如何なる罪の已にありてや斯く快よからず思ひ玉ふならんと自ら思ひ巡らし或は悔ひて母に罪を謝するか或は改めて母の愛を再び得んとするか到底かの打ち叩かれてたゞ腹立しき心地を起すのみとは大なる相違あるべく隨て其心に母の教を受け入るゝことは強よかるべきなり

右に謂ふ所の理合はたゞ議論の上に於て尤ときこゆるのみに非ず實際に於て斯る例甚だ多し或る學者の書き記るしたる教育論に此に所云る愛育の趣旨を行ひつね〴〵太たく子を愛する母ありけるに或る日其の在らざるときに一人の子其の弟の髮の毛を鋏もて切らんとし己れの指を傷けたり母歸りて之を聽き何事とも言はずたゞ何となう其の子に對して物足らぬやうに持てなしければ子は其れより快々として樂しまず如何にもして母の機嫌を取り直さんと思ひ煩う樣に見えけるが數日にして母また事ありて他出せんとしたるに其の子は急はうに之に取りすがり何卒他所へ行き玉はざれと願ふより何故にかゝる事を言ふにやと問ひ窮むれば母樣在はさずて復た前日の如き惡戲を致しては濟みませぬ故と幼心の忠見えて願ひしとぞ此の母にして若し前日常の人の如く事もなげに烈しく之を叱りならすか又は之を打ち叩きたらんには子の母に於ける愛情は必ずや減ずとも増すことなく況して其の惡戲の惡しかりきことを心より悟りて之を復びせざるやうに覺悟せんことは斷えてなかるべし此れ愛育の道に隨つて子を教ゆるの工夫なり蓋し如何に幼き子供なりとも恐ろしき顏を見れば泣き喜びたる顏を見れば懷くべし況してや常に己を愛で育ごくむ所の母親にして己に對し快ちよからぬ面色したるときと限りなき喜ばしき景色にて己を愛づる時とは其の心の中に感ずる所ろ甚しき相違あるべきこと勿論なり母になづきたる子は母

の不快なる面色を見るハ身を叩かるゝよりも苦しく母の快ちよき景色を見るハ千金を得るよりも喜バしく感ぞべし然れバ母たるものも亦た平常よく〳〵其の子を愛し之と愛そるの情を特更に内にひそめて現ハさゞる如きとなく成るべく表に現ハして心限り之と愛し其の愛情をして日々に親密とならしめ子をして此の愛情を失ハざらんやうにのみ心掛けしむると専一とすべし斯れバ一家の内ち平和喜樂にして母と子との愛情も親切清潔なるべく然うも其の間だに於て家庭の教育十分に行ハるべきなり之を愛育の道と云ふ彼の下等社會の母、上等社會の親、宜ろしく此の道に隨つて其の愛子を教へ導き之をして完全なる紳士貴女となるを得せしむべし

○惡行と防ぐの論

左の一篇は東京獨立新聞と云へる英字の新聞帋上に於て論述ありたるものなり今や世の木鐸を以て任とする文人記者にして平常不德卑汚の言辭を吐露し恬として愧るを知らざ甚しきハ姦通淫奔の事を帋上に記して得意となし娼妓藝妓の品評を認めて粋に得たりとするが如きありて日本國內の新聞紙類ハ三四を除くの外か皆な不清潔と汚穢とを以て充滿するものなり故に日本婦人の教導を主張して世に鳴る所の新聞雜誌の如きも倘ほ藝娼妓の世に存するを反つて功德あるとなし踏舞の流行と以て女事の一進步と見做すに至る其の道念ハ下賤なる慨歎するに余あり吾人不肖と雖も日本國民の道德と維持ぞて之を神聖に導かんとを期圖そるもハあり日本國民の道德を維持するに於て先づ太甚しく墜落したる婦人女子を教導して之に清道の力と惹起さしめんとを期圖そるものなり故に屢々此の期圖を論辨し且つ早く廢娼の論を述べ亦た踏舞の不可なるとと說けり當時內國の新聞記者中爲に一の注意を之に惹くを得ずして今ま外國人の筆に於て此の警世の文を得たり幸う不幸か吾人慨歎の念に禁えざ今ま左に之を譯述して吾が內國の文人記者に警醒する所ろあらんとを請ふ

東京ハ一大新聞報じて云く吾が政府ハ娼妓の增加するを防ぎ且つ抱主をして其の妓を好遇せしめんとを希圖さるゝに拘ハらぞ抱主中往々不心得の輩ありて其妓を強迫し之をして苦悔を脫するを得しめざる類有之により警視總監ハ近頃令を布き若し抱主慘酷に遇するときハ最寄りの警察署へ密かに訴へ出づべし早速に之を保護すべしと宣べられたり

凡ろ社會に存する惡行を防がんとするに當りては世人をして全く掛念せしめざるを可とする如き害惡に注意せしむるとみきを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

得ざるにより斯る害惡に對ゑ改良醫治の方法を施さんとするに臨みかの惡行に關はりたる輿論を惹き起こし之と十分ゑ論辨するとは亦た止を得ざる勢なり

日本には道德の感覺極めて墜落せる一種の婦人甚だ多くして爲に其の誘惑に陷る所ろの少年學生亦た甚だ多く其の淫奔放蕩は殆んど止め難き程なり斯く自らも腐り世をも腐らする輩も其の數大にして製造場の雇人より位高き者に至る迄で上下の差別なく社會に蔓延せり然るに未だ此の墜落したるもの及び道德を害せられたるものを保護すべき法律の制定せられざるが如く不幸にしてかく迄で此の國に著るしきことゝありたる一体の不道德を抑ゆるに足る程の輿論も亦た起らざるなり但し吾人が茲に著しきことゝなりたると云ふものハ日本の新聞帋に於て日本婦人の不德と論じて國辱なりとしたるもの屢〻之れありしに由りて特更に斯の如く揚言したるなり

左れば今ま適當なる處置を行ひ人民に道德と尊むことを教へ且つ此の重大なる社會の問題を解きて日本の耻辱となるべき此れ等不道德の媒を取り除くる策を運らすハ尤も大なる急務なるべし蓋し此の氣儘放蕩なる淫らの風習ハ日本國民の全体に及べるが故に凡そ國を愛するの心あらん人ハ宜しく巳の責任を辨まへ其の力を盡して此の恐るべき害惡を防ぎ日本の少年女子が身体と智力とを多く害ふを救ハざる可らぜ

英國のムテムポラリーレビウに或人の書き載せたるを見るに凡べて害惡の中にて尤も深く且つ尤も大なる者ハ確く人類の天性に根ざしたる者にして尤も甚しき亂暴の存するも亦た茲に在りとす然れ共彼の電氣の如きハ天地の間だに尤も恐ろしく亦た支配し難き者にして恰も人の情慾の比と爲ぜに適えりと雖も文明の進むに隨ひ追々に溫和なる光となり之を日用の事に使用するを得るに至れりと蓋し人類生來の情慾も亦た道德の律法に依りて之を支配する時ハ極て大なる幸福の源となるべきなり

凡そ堅固に根ざしたる害惡を防がんとなれバ反對の組織を堅固にせざれバ能ハざ婦人は遂に如何なる程度まで進むことを得べきか亦た女子ハ如何に貴きものなるや此は其の墜落せる深さの割合に由りて知らるべきなり若し婦人を教育して其の性質を高尙にし之を貴き用ひに供するときは今の賤しき樣ハ其の天性の必要にあらぜ實に貴き價値ありて尤も高尙なる目的の爲に造られしあるを知らん日本の輿論道德に傾き不品行猥褻を以て男子の愧づべきことゝ爲すゑ至らバ少年子弟もし明かなる神經と強き筋骨とを保たんと欲せバ情慾をつゝしむべきの道理を以て諭とさ

る丶ことならん又婦人ハ我が本來の價値を其心に留めて現在已をはづかしむる者の玩弄物となるとは社會の風習によりて免れざれぬことなるに至らん且や若し政府に於て婚姻法を制定し瑕なき女德ハ其の嫁ぐべき男子に於て亦た瑕なきと要求を得るやうにならバ此の日の本の國は亞細亞東方の摸範となるべし斯てこそ日本の男子ハ尤も適當の義に於て女の頭とあり女ハ亦た外國人なぞと雜婚せずして立派なる國民の母たるに至らん

近來日本に開らけんとする外國の風習の中蹈舞の如きハ吾人の甚だ非難する所ろなり日本古來の舞樂にて能狂言猿樂の如きものハ徒然となぐさむる爲めの害なき遊戯ならん西洋の輪踊りなどにて男女互に抱き合ひ亂に惚れ近きて狂るひ廻るハ今日の惡德中に數うべきものなり斯る悪しき風俗が文明の基督教國より開らけ來て此の國の害となるとに付き吾人外國の民として此の說と爲すに當り少しく躊躇して自ら憚る所なきにあらず然れど日本に來りて斯る悪風を弘むる輩ハ歐米諸國の純粹なる眞民に非ず其中にて身分よき生れ人もあらん然れど吾が大合衆國の基礎柱木と云ふべき者ハ先祖なるピウリタンが男女の間を正くし宗教に敦き民が婚姻と嚴かにしたる事實なり歐羅巴諸國の人口多き都府ハ政府と敎會が力と合せて道德と維持し居るが故に國民の品位風俗を保ち得るなり既に太甚しく腐敗せる日本の道德を更に腐敗せしめんとする彼の放蕩無賴なる外國人は其の道德を以て西洋の風俗を維持し居る最とも數多き眞民の代表者に非るなり凡べて穢がれたる事猥褻なるとも嚴びしく征伐し志を合ハせて凡そ愛すべきと凡そ淸きと亦た令き聞あるとを鼓舞振作せざる可らず

●新報

○娼妓藝妓　明治五年の十月政府も人身賣買に類する所業を禁ト双方に如何なる約定のあるに拘ハらず政權と以て之れ等を解放せしめたるも非常の斷行にして世人をして驚歎せしめせり此時政府も令を下して曰く

娼妓藝妓等雇入の資本金ハ貯金と看做す故に右より苦情を唱ふる者も取糺の上其金の全額を取あぐべき事娼妓藝妓は人身の權利を失ふ者にて牛馬に異ならず人より牛馬に物の返辨と求るの理なし云々

當時政府の見識實に感ずべし然るに近來ハ公然たる宴會に藝妓の陪せざるとなく甚しきハ外國の帝孫に藝妓の舞を覽せしむる如き言語同斷の事のみ行ハるヽことなりたるハ啻に道德上に於て愧る所あるべきのみならず明治五年の當日に對して赧然たる

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

所なかる可らず尤も喜ぶべきハ昨年末の改革と共に官海中往々規約を立てゝ宴會に藝妓を招かず花里に吟行する者を罰する等の事に決したる向もありときゝぬるとなり希くハ世上の新聞雜誌亦た當に其の任とする所を省み所謂る牛馬の事を記して才とし粹とするの汚穢を止め日本國民の道念を高めてその心志を淸潔にすることを勉むべし矣

○情死と淨瑠理　情死ハ南朝懈衰の頃より起りたるものにして吉野拾遺に若黨と内侍の女の童の木ぶかき山に入りて刃に伏したる趣を記したるを初めとせり固と淫を樂んで世の譏を思はず遂に情に迫りて恥を路頭公衆に曝らすこと道德の罪人にして甚だ惡むべき限りなりとハ云へ其の教育と其の事情とを思ふときハ亦た憫れむべきものあり維新前ハ此の事大に行れて人も見て奇しとせず死するものも反て之を榮としたる如きも今時に至りて大に其の數を減じたること一にハ人智の開けたると婚姻の稍や自由となりたるに由らんか然れど新聞帋の報ずる所に由れバ此の事尙ほ全く滅せずして時々所々に之れあるが如く亦た刃に伏して情死せずと雖も二人相交りて爲に困難に遭ふの事ハ反つて俗に粹と云ふものとなして之を愧ぢざるのみならず或ハ之をほこるが如き靈魂上の情死ハ尙ほ全く滅ぜざるなり吾人は如此き少年女子を憫れむと太甚しく如何にもして斯る弊習と人氣とを絶たんことを希ふに付き思考するハ情死の東京に多きとなり此れ必竟清元、常盤津、新内、等の淫猥なる淨瑠理此の地に行はるゝ多くして婦女の心志を知らず識らざるの間に墜落せしむるの故にあるべし世の婦女を教育する者ハ勉て如此き淫遊の行はるるを防ぎ且つ三味線の流行を止ると前号に於て卑見を陳べたるが如くなるべし

●婦女子宜く速記術を學ぶべし　第十二号の「女ハ一の技藝あるべき事」と題せる文中に凡そ手又ハ指を要する精細の仕事ハ女子の方男子よりも優ることと掲げしが速記術（人の言語を書き取る學術）の如きハ最も女子に適切なる學術なり是れ記者の私言に非ず米國の女學士ボアン氏も「速記術ハ女子に最も適切なる學術なり何となれバ女子ハ男子に比ぶれバ事に綿密なる性質を有すればなり」と言はれたり、現に西洋諸國に於ても婦女子の速記者日に月に增加するとのことなれバ我國に於ても先覺の女學生諸君ハ宜く速記術を學びて速記者となり其身を利し併せて社會を益し玉はむことを望む

○ボストン女記者　米洲合衆國中ボストンを以て尤も學術の盛んなる都となすとなるが婦人娘君にして新聞帋の編者たるもの

凡そ六人ある旨此頃の西洋新聞に見えたり

○御歌會初（つゞき）

講頌　從四位臣藤原朝臣基正上（石山）

くれたけも君かみよにやならふらむ千歳をかけて色のかはらぬ

預撰　權掌侍正七位　藤原敦子（税所）

あらたよの風になびけど呉竹の千代のいろこそかはらざりけれ

阿部恪子（東京府華族阿部正義妻）

こゝのへのみはしのもとの呉竹はわかみどりなり年はふれども

宮内省十三等出仕正七位臣藤原朝臣勤（谷）

呉竹のへにけむ千代はしらねどもなほうらわかき色ぞみえたる

平野神社主典　水莖磐樟

君がよの千歳のほかにひさしきはみそのゝ竹のみどりなりけり

長岡銀藏（静岡縣平民）

君が代のめぐみの露のかゝらずは竹のみどりもひさしからめや

松本與平（岡山縣平民）

うつしうゑし身はおひぬれど呉竹はむかしながらの緑なりけり

○以上

○新聞は種類分けと題して吾人が前号は雜報中に記載したる者を駁するの説二月九日の改進新聞に見えたり吾人は今ま之を左に掲げて讀者の一覽に供ふ

女學雜誌といふ女子教育を專らとする記者先生は「新聞紙と緣日寄席」と題し女子の讀むべき新聞紙を種類分けして小新聞中には讀賣新聞の如き大新聞中には時事新報日々新聞の如きもの尤もよろしと明記して其他の新聞紙は讀みて害あるが如き説を下し給ひたるは如何にも卓見らしく聞ゆれども失敬ながら同記者は未だ新聞紙てふ物の性質を御了解なき事と思はるゝなり成るほど同記者の云ふ如く讀賣新聞なり時事なり日々なり孰れも良新聞には相違もあるまじけれども他新聞を目して直ちに不道德にして三新聞の反對たる種類と見做そは如何なる見解に出でたるか同記者が云へる密通の續き物間夫の以下次号に心をこめて日々に樂しみ讀む云々は讀者の思想にある事にして开を記載したればとて是を指て不道德の新聞紙なりと評するは俗にいふ井蛙の見にして苟くも供に條例の下に立ちて營業をなす同業記者とは思はれざるなり元來淫奔卑猥なる話は努て之を御け是れと記する際には膺懲の義を明かにせん事に注意するは我社を始め各社ともに同一の點にあるとは其紙上を閲しても明瞭なるべし然るに同記者が猶同記事ある三新聞を賛して私しに他社と種類を分たるは察するに何方よりかの依賴をうけ失敬にも偲る評を下せしならんか抑ゝ新聞紙は社會の出來事を報道し人民をして開達進歩に誘導するを力むる具にして決して女子の教育のみを專門とするものには非るなり爾れば今日の女子たらんものは同雜誌の如き管見説に拘泥する時は自然と其識狹く其智進まず遂に明治文明の母たる能ざるに至らん女學雜誌記者よ記者も今后は三新聞をのみ良新聞なりと思ふ陋見を去り我邦の新聞紙のみならず普く萬邦の新聞紙を閲するに至らんことを女子に勸奬し笑ひを文明人に招く勿れ貴重の紙上へ長々しく辯駁を掲げんも大人氣なきにゝたれど同業者の交誼よより聊か此に一言して同記者に告ぐ

●文學

○つれ〴〵草

大和文を學ぶに源氏物語をよしとするもあれど卷數の多きと文

章の切れなきとにて初學には便あし惣じてつれ〴〵草こそ初ひ學びには尤も宜しからんとは曾て吾人が述べたる通りなるが付きては此の書全部の太意なんどと知り置くでは不可なる所もあるべしと考へ今ま諸書に此の大意を評そるものどもを集め擧れバ左の如し

兼好得道の大意ハ儒釋道の三を兼備そる歟草紙の大体ハ清少納言が枕の草紙を摸し源氏物語の詞を用ゆ（壽命院抄）

大抵清紫の二女より事起りて青きと藍より靑く台教と根本とし老莊と枝葉とし生死無常を觀じ時序風景を翫び男女の情を捨てゞ世俗を憤りて已が志を述べたり誠に和語の書の中殊にそぐれたるものなり（旬解）

作意ハ往々方便說を寫し寓言を學ぶといへども退てその意を立る所を察すれバ皆な日用に便ありて去うも中道に至らしむるものなり（諸家聞書）

此の書を佛者がよめバ專ら釋教にいひおとし儒者が講ぞれバあとく〴〵五常の旨にとりなし歌學者ハ詞花言葉をかざりて歌の道にいひ課を是れ皆な去かる可らず兼好が心ハ何れの道にも人のをしへとなるべき處を引き用ひ終に已が本意をいひあらハそ然れバ三教一致と心得畢竟の處ハ人間常住の思をやぶりて無常變易の旨を觀して一部をあめるものなり左れバ說き去り說き來るところ皆な此のあらましなり此の本意を以て全部を見るべし夫れ道ハ善惡二つの外なし善をそゝめ惡を懲しむるいましめならバ何れを是とし何れを非とせんや必しも一偏になづむ可らず（諺解）

しかれども薙染の人のあらハせる本ある故に往々に大事とのみいへるハ佛の道なり又た終りにも佛のいじめをとひつめてむそべる事なれバ宗と立るところもみえたり又た書の名を引き用うれども广河止觀にも侍ると手に入りたるやうにいひ論語といふ文にもなど〻見えければ法師の筆のからによくかなひけるなり（參考抄）

實にも此の書ハ句解に評さる〻如くなるべし書の初めにもある如くつれ〴〵なるまゝにそこはかとなく書き付け久しくして巻を爲したるなるべけれバ素とより一條の主意の貫きとほりたる如きハなきなりたゞ讀む人及び敎ゆる人ハ淫卑なる條を除き覽玉ハんにハ此上なき良き書物なるべし

○大和歌詞（ろ）（は）

●ろうせらる丶トハ嘲ケラル丶コ●

●花いろころもトハウツロヒ易キコ○そつか夜トハ月ナキコ○

となかたみトハ花ツムカタミ○とゝきゝトハアリトハ見レド會ハヌヿ○はらからトハ兄弟ノヿ○花になく鶯トハ歌ヨム人○となたちバなトハ昔ヲ忍ブヿ○としたかトハ戀スル人○とつらぐひそトハ珍シキヿ○となかたみトハカタラヒヲ云フ心○又カタヲモヒノヿ○となより月トハ思ヒ絶タルヿ○はなかつみトハ眞コモ○はなたの帶ハ亦た眞コモノヿ○はやしのかねトハ六月○はふりこトハ神人ノ事○はゝやトハ本ノ家○春つげ草トハ梅花ノヿ○はやりうのトハ口バヤニ物言フヿ○はひろぐさトハ瓜○はつ代草トハ正月ノ門松○はまもる神とハ木葉守神○花のかたミトハ花ノ影ノウツリ水○はなたいろトハ空色○はながたミトハ花入ルカゴ○はなち髮トハ亂れ髮○はにふのこやトハ卑シキ家○はなのきミトハ杜若○はくさトハ細カナル草○はかなミトハ果敢ナシト云フヿ○はるまちぐさトハ冬ノ梅○八朔ハ八月朔日○はてなきトハ一思スルヿ○はつねトハ鶯ノヿ○はやたつトハ川の名○はつたれトハ始テ塩ヤクヿ○はもトハ物を尋ルド●

○帝号の讀例

日本歴代の帝号よれ皆なそれ〴〵の讀例ありて漢呉音訓の混淆せる清濁輕重の差別ある容易によみ別け難きもの往々之れあり由て先年文部省に於てこの讀例を定められたりと雖も知るもの稀れよーて區々よおやまるもの多けれバ今ま百二十二代の帝号中漢呉と清濁とのまかち特に多きものゝみを左にかゝげて示す

神武	綏靖	孝元	崇神	垂仁	神功	應神
反正	允恭	仁賢	敏達	崇峻	皇極	齊明
天智	天武	持統	文武	元明	元正	聖武
淳仁	光仁	桓武	平城	淳和	仁明	文德
清和	陽成	宇多	朱雀	村上	冷泉	華山
後朱雀	後冷泉	白河	堀河	鳥羽	崇德	近衛
後白河	二條	高倉	后鳥羽	土御門	御堀河	後深草
龜山	後宇多	伏見	後二條	花園	後村上	後水尾
明正	後光明	後西院	靈元	東山	仁孝	

●佳傳

○心のいもせ（天）

前號に夫の爲に書を讀むと題して英人某女氏の事を記るし吾が國にハ絶にてなかるべき美談なりと賛したるに其の后ち社友月の舍主のぶぬしより送りこされたるある傳記やうの報告はいとよく之に似て双美の名とも附すべき某婦人の貞操を述べたるなれバ喜びの余り茲ぶ心のいもせと題して掲ぐるとと

はなれり
なげきとて月やは物を思はするかこちがほなるわが涙かな」誰か知らん今年今夜の月日矢の如くめぐりて万感異るげにも思の千々なるは木の葉落ちて空さゆる秋の夜の月見むときなり茲に都を距る百里あまり國を知らねば名も暗きやゝ繁華なる一城下あり城倘ほ存すれども草生ひ茂りて所々に畠作のあとあり士族離散したりと云へど口を糊りしがたきやからの留れるも亦た尠からず其が中に某と云へるは稍や學識もありて口才にも長けたれば自づと人々の敬ひをうけ天晴れ都地にあらんには名をも家をも興すべき人物ぞとかは見ざればとりどりのうはさするも多かりけり左れば某も亦た自から高しとして功名の心制しがたく或る年妻一人を殘して獨り東の都に上り直にも高官に昇らなん思のにはかには達き得で暫くは猶豫ひ時を待つと其初めよりよりの便もありけるに此頃はや半年あまり鳥の翼の音信絶にて早やくも厂あき渡る秋の半ばとはなれり妻は朝暮に案じ過して片時だも忘るゝひまなく庭前の梧桐葉を落して戸を叩くときは便りのおとづれと思ひ夜の風靜かに音して窓のやぶれ戸自らに聲ある節は吾にとふ人あらんといぶかるなんど見るも慘ましき風情なり今夜は仲秋の月さやかに澄み渡りて一年の光爲にくらく戸々の家人は端ちかく出で寄りて樂しげに語り合ふも多かり左なきだになぐさめ得ざる彼の妻は千々の哀を我身一つに思ひ爲して月にかこち乍ら歩むともなく舊城内やぐらの下に來れり物思ふ身には靜けきところましならめとて獨り樓の上に昇り靜かに座して先づ外の方を見れば浮雲悉く消にて一天さながらに青海原の如く磨き出したる圓月は色白くして青濤の上に流れ遙かに聳つる松柏は影くろくして月下に踊り友に離れたる鳥はたゞ一と聲に樓頭を鳴き渡る景色の淸くして靜かなる中々に寫し出ん言葉あらず此時妻の心には果して何事をか考へつゞくる徒らにながめ案じて月をのみかこつ風情したり嗚呼人間生れ出でゝ尊きは父母に過ぎず吾を愛する父母に過ぎず父母の外吾が一体となりて吾が思ふ所を思ひ吾に患あれば憂ひ喜あれば悅び日を異にして生れ日を同ふして死せんと思ふものは夫と婦の妹脊ならん良人家を去つて既に一年東西地を異にする百余里思を通ずるの厂ふたゝび復へらずして吾を愛するの人久しく吾に言はず妻の心果して何物か樂しからん此月若し妾が心を知らば亦能く良人の心を知らん希くは東都客舍の窓幸にひとしく此の月に向ひて共に思ふ所を此の大鏡にうつさんとは亦た愚かならざる情なるべし」此時妻には固より知るべうもなけれ

月耕

ど彼の東都に上りたる某と云へるハ其后久しく好き便の身を引くよそゞもなくて事もあらぜ旅客の腸を斷ちけるか風と眼を煩ふを元として四月余り重き病にのゝり知る人あらざれバ代りて文したゝめんとゞなく亦たいさゝめの患と思ひて特更に知らせざらんと思ひければ今日まで音信もなく打すぎけるが此頃少さか病怠りて今夜さし入るゝ月の光をながむるに朦朧として目にハ定かに見えざりけり

○婦人羅馬の滅亡を救へる事（二）

母ベチウリアは暫しの間だ言葉もなくてしほたれけるが漸くに思ひ起して嚴然と身を搆へヤヨ愛子マルシウス汝少かの怨あればとて夷狄野蠻の野武士どもを引き從へ多年四方に名を轟かしたる此の羅馬帝城と打ち破らんとハ抑も何等の心ぞや人と生れて民を愛し大にしてハ國を愛す此に越したる武士道あらじ若しも此の道に違ひふバ假令ひ山を拔くの勇ありとも是ハ只だ獅子の力のみ汝の軍の過るところ母は子を失ひて子の空體を抱き子ハ父を失ひて怨ハらさん力なきをかこつ其の怨恨不幸の帝城に注進あるたび日に幾回母ハ心胸を裂きたるぞや汝の軍の敗れなバ汝の身をバ案じなん汝れ軍勝を得て途民困厄の報あれバ亦た一層の苦勞あり今日まで母ハ帝城內幾百万人の其の中に怨ハ此の人の子なるぞと目ざして云ハぬ人々の心の刄は倚更と剛の質にも察せよかし汝の怨ハ平民にあり平民のみを苦しめて貴族ハ其の儘に拘ハらじと思ふも亦た誤りなり貴族の歲入収益は皆な平民の供ふる所ろ平民なきは手なきが如し貴族此の后ち如何にして羅馬の城下榮えんや汝ぢ一朝の勇をたのみたゞ少かの怨を棄てぞ明日にも此の城を破らんとならバ城を守りて汝の軍を防ぎ先づ第一に打死するハ此の年老ひたる母なりと知れ世界開けて初て立ち天下廣きに彌りさかゆる數百年來の此の帝城野蠻野武士にふミにじられて甘んじ在らん人のミかハ汝城に入らんときは國を愛する男女老少血を流して河となし汝の軍を沒ぞべし骨と埋めて壘となし汝の軍を留むべし破らんとならバ破り見よ如何よマルシウス如何ぞと辭激すれバ愛國の念あり眼うるめバ恩愛の情あり聲音の低きものハコリチラナス（マルシウス）の胸を刺し高き響ハ全身を壓へ屈ぞ如何に剛勇の猛者ふりとも誰か感ぜざる所なかるべきコリチラナスハ潛然として涙雨の如く落ちかゝるを拭ひも果てぜ大呼して母上羅馬は救ハれたり汝の愛子ハ死を受けんと奮然立ち上りて一令し兵を率ひて退き行く暮近かくして夕日光を失ひ天色暗くして風自らに寒し肅々として行く軍の兵士、一將功を沒して万民生を得ん、と歌ふ心も自らに見送

る母の眼よ見え言なくして別るらん妻の思はいと哀れなり

○烈婦假名畧頌

一たんの。勇氣より猶。年來の。貞節こそは。まさりけれ。しもつけの國。あしかゞの。こほりの内に。川崎の。村の農民。逸八が。後家のはつころ。人なみに。すぐれしものと。きこえたれ。はたちになりし。時とかや。よめ入しつゝ。あくるとし。男子をまうけ。その名をば。勘彌と名付。寵愛す。しかるに夫。逸八は。風のこゝちの。おもりつゝ。いまはのきはの。ひと言は。もしも醫藥の。しるしなく。この世をさらば。はつくさの。わかき身なれば。しかるべき。人にもそへど。いひければ。うらなくものを。のたまふよ。さらぬわかれの。ありともいかで。をつとの家を。いづべきや。いはんや舅。しうとめの。おはするうへに。この子さへ。のくてしあらば。とにかくに。もりたて家を。つがせんと。かたくちかひて。わかれしが。それよりこのかた。十とせあまり。ひるはひめもす。農桑に。身をくるしめて。ほねをたり。よるはよすがら。いをやすく。ぬることもなく。老ひとに。つかふるかたて。勘彌をも。をしへそだてゝ。としをへぬ。勘彌が四に。なりければ。しうと勘右衛門。いふやうは。もはや乳房を。はなれても。そだちもすべし。その方は。外に縁をも。もとめよと。有し時にも。逸八に。ちかひしごとく。いなびつゝ。朝なゆふなに。つかへきて。をこたるひまもなかりけり。かゝりしほどに。勘右もん。中氣をやみて。こしたゝず。のてゝくはへて。老ぼれて。ひるはひめもす。ねてくらし。よひあかつき。わかちなく。めさむる時を。朝といひ。食をこのめば。こゝろよく。その度々に。すゝめつゝ。今しも箸を。をきぬれば。又も食事と。このむをも。さらにうむいろ。みせずして。しづのをだ巻。くりかへし。むかしと今に。すぎれねの。ながき年月。つかへけり。又ある時は。飛彈たくみ。うつ墨なはの。すぐなるも。老のむかしの。わざなれば。見つゝ心を。なぐさまば。病をやしなふ。ともやと。近きあたりに。はしらたて。棟あげなんど。きくときは。やとほゝけたる。老人を。せなにかきおひ。つれゆきて。心ゆくほど。見せけると。きくもめでたき。老人かな。又ある時は。佛神に。祈誓をかけて。よなよなも。水おりかきて。すあしにて。やまひをいのり。かくばかり。心のまこと。つくせしも。其かひなくて。寛政れ。とうの年にぞ。身まかりし。七十七とも。きこえける。夫にをくれし。時よりの。年の貢は。さらなりや。醫師の禮式。佛事の施物。家につきたる。つとめさへ。一もかくと。なかりしは。皆此はつが。あけくれの。手づくりところ。聞えけれ。勘彌は父の。なき子とて。あなどられては。家たゝずと。ことさら

心もちひつゝ。やしなひ育し。かひありて。手習なども。ひとよりは。よくおぼへつゝ。川浪の。立居ふるまひ。行儀さへ。にうわ者とて。ほめらるゝ。はつは女の。かゞみなり。勘彌はわらべの。かゞみぞと。村の内外に。いひつたへ。ほまれと得つる。折しもあれ。いかなるすぐせの。ちぎりにや。去年の霜月。廿日あまり。よひやみのよの。謎なるに。みどりのはやし。かげしげく。はつが家をぞうかゞひける。はつは勘彌に。そひねして。そこしまどろむそのひまに。いかでかしのび。いりきけん。二人のをのこ。うらうへを。しかとをさへて。うおかさせ。ひとりのぬす人。をしいれの。衣類雑具や。わきざしの。刀をうばふ。物をとに。奥にいねたる。しうとめの。聲たてければ。そやつきれ。ものいはせずと。わめくこゑ。はつきくよりも。たへかねて。たゞしうとめを。きらせじと。おもふ念力。まさりつゝ。大のをのこが。をさへしを。そろよりぬけて。飛でゆき。しうとめきらんと。そるところを。しつかとゞらへて。もたらかさせ。そのいきほひにや。たふれけん。ふたりはにげて。かなさへぞ。をさへられぬる。ぬす人は。身とのがれん。けつかみつ。せどのはんりの。あたりまで。十間ばかりぞ引てゆく。持たるやいばを。うちふりて。きりても突ても。はなさゞして。はつはかぎりと。聲をあげ。人々出あひ。給へやと。よばゝりぬれば。ちかどなり。何某それがし。そりかさあり。なんなくとらへ。おほせけり。はつは十ところ。手をゝひて。息絶なんとしけるをも。人々いたはり。やしなひて。命につゝが。なけれども。むまれもつかぬ。かたわにや。なりもやそらん。あらたまの。年月へぬる。みさほより。ますらをだに。まさりぬる。いさましかりし。はたらきを。わがおほ君に。きこえあげ。文化といへる。四とせの春。小判のこがね。五十兩。持つたへつる。三石餘。諸役免除の。つくりどり。たぐひまれなる。恩賞に。馬うしなひし。おきなさへ。おもひ出つゝ。しかすがに。上中下の。人々も。是をかんぜぬ。ものはなし。みどりのはやし。しらなみも。しらぬめぐみの。たまものは。末の代までの。さかへみそらし。

右は太田蜀山人の一話一言に載する所なるが一讀して感服の餘り本誌上に轉載して佳傳の欄内に埋むと云ふ

●叢話

○日本古代女流の風俗（三）

偖その例證を古き書等に就て云ば枚擧に暇あらねど唯二三を云ば事足ぬべし古事記に大國主命の其后須勢理毘賣命の嫉妬を厭て大和の國に上り給ふとき后の詠て夫大國主命に奉たる歌を載

す曰く夜知富許能。加微能美許登夜。阿賀游富久邇。奴斯許曾波。遠邇伊麻世婆。宇知微流斯麻能佐岐邪岐。加蚊微流。伊蘇能佐岐游知受。和加久佐能。都麻母多勢良米。阿波母與。賣邇斯阿禮婆。那遠岐豆。遠波那志那遠岐豆。都麻波那斯云々これ歌ハ義を畧解せバ吾が大國主(夜知富許能加微能美許登ハ八千矛神の命にて大國主の別名なり)ハ男にて在バ國の島々磯の先々にも妻を有たまふ可きど我ハ女なれバ右樣なる譯にも出來ず爾を置ては別に男ハなく他に夫ハありませぬと怨ミ謳へるなり人代となりても上下おしなべて一男數妻を有り往古ハ天皇の御妻を凡て伎佐伎となへ其伎佐伎てふものハ數多くありしなり(俗に天子に十二の御后といふとあり是に近し)後世に至りては皇后を一人と定められ其他を或ハ妃といひ或ハ夫人といひ或ハ嬪といひて同じく至尊の寢席に預れり是皆な漢土の風に效へるものにて即ち大寶の後宮職員令に云ふ妃二員右四品以上夫人三員右三位以上嬪四員右五位以上この後また名稱かハりて桓武天皇の朝より女御淳和天皇の朝より更衣といふ者いで來り仁明天皇の頃より遂に妃夫人等の稱ハ廢れたり光仁天皇の朝よりして尙侍の女官を以て至尊に寢席を進むると起れり此の如く世とゝもに其名稱等も移り變りたれど一男數婦の實に至りては變るとなし品下りたる人の樣ハ如何なりけんと探ぬるに檜垣集に云船に乘るとぞる程に男も來り此うハなりこなみ一日一夜よろづの事をいひ語らひて詰朝て船にのりぬ云々(前妻を古那美といひ後妻を宇波那里といふ此語は古事記日本紀及び和名抄などにも見えて前妻とハ或ハ死し或ハ離縁せしものを言にあらず後妻に對していへるにて最初に娶し妻を古那美となへ後に重娶る事を宇波那理となふ)大和物語なる良峰宗貞遁世せし條に妻ハ三人なん有けるを云々ともあれバ強ちに天皇の御上のみにあらず臣民にても身のほど〴〵に隨ひて二人或ハ三人幾人にても妻を娶しこと知れたり

(未完)

○假名

本朝の人昔しハ手習ふ初めに難波津にさくや此の花冬ごもり今をハるべとさくや此の花。淺香山かげさへ見ゆる山の井の淺くハ人をわが思ハなくに。と二歌を手本として假字を學びたりしと古今集の序にも見えたり然るを今の伊呂波を作りて此の歌に換へたるハ弘法大師なりと云ひ或ハ護命僧正と兩人の作なりと云ひ傳ふ簾中抄に曰く伊呂波四十七字ハ本歌の詞なり以より遠に至る十三字を護命僧正作り和よりすゑ至る卅五字を弘法大師つぐと云へど實ハ弘法大師一人の作たると明なる如し而して此

の假名の大意は諸行無常云々と四句の文に應ずると左の如しと云へり

色は匂へどちりぬるを　諸行無常
我世たれぞつねならん　是生滅法
有爲のをく山今日超て　生滅滅已
あさき夢見し醉もせず　寂滅爲樂

又た片假名は吉備公の作り玉ふと云へり

○俳諧の話

俳諧師と云ふ者古へはなきものなり近代のとなり連歌師は古へよりあり俳諧歌と云ふ歌は古今集にもあり上古より有るとなり俳諧と書てたはぶれごとゝよむなり常の歌のごとく正直によまず詞をかざりてたはぶれたる事をよむを俳諧歌と云ふなり其躰をまねて連歌にたはぶれ事をいふを俳諧の連歌と云ふ是今の俳諧と云ふものなり俳諧歌と云ふものは狂歌の事なり近年の俳諧は文字の數の合たるばかりにて常のあだ言なり

○したひも

下ひもとも下の帯とも云は小袖の上に結ぶ常の帯のとなり裝束を着すれば裝束の下になる故下ひもとも下の帯とも云なり下ひも下の帯は古歌にもよみたり今俗にふんどしのとを下ひも下の帯と云はあやまりなり

○うちかけ

女の帯したる上に小袖をうちかけて着るをうちかけと云ふ今も京大坂などの人はうちかけと云ふなり東京の人はかいどりと云ふなりかいどりと云ふとも古き書に見えたれどもかいどりすがたなどゝ云はこのうちかけのつまを取りたるを云ふなり小つまをかい取るなどゝ云も同じ詞なり

●寄書

○世ノ姉妹ニ告ゲマツル　青山北四　雪ノ舍檪女

我ガ日ノ本モ十餘リ九年以來ハ萬ノ事ノ日ニ日ニ彌開ケニ開ケ行クニ唯女ノ樣ノミハ少シヲダモ改ル事無キト世ニ論有ルヲ聞キ侍リヌ同ジ天地ノ下ニ生立ツヽモ是ノ差ノ有リヌルハイトモ口惜キ事ゾカシ然アルニナン去年ノ夏中ノ頃ヨリ有志ノ君達思立ヌトテ是迄女ノ結ビ居リシナル究屈不便且養生ニ害有ル結髮ヲ改メ更ニ便利爽カナルノ束ネ髮ニ成ンテフ事ヲ世ニ公ニセラレシヨリ早クモ束ネ髮ニ改メ賜ヘヌル姉妹達ハ共ニ是ノ爽カナルヲ悟リ給ヘシナンメリ

然ルカラニ妾モ是時ヨリ右ノ如何ナルヤヲ試ミ侍リシニ其ガ効シ實ニヤ大ナリ先ヅ養生ヨリスレバ妾常ニ頭ノ痛ミヲ持前ノ病

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ニ惱ムコト久シク時々ハ眩暉ナドアリシモ束ネ髪ニセシ此ノ方ハ何時シカ忘ル、ガ如ク今ハ早全ク是等ノ憂ヲ覺ヘズナリヌルモ偏ニ束ネ髪ノ効ト思ヒ侍ルナリ先キニ束ネ髪ニ改メヌルヨリ未ダ一年モ過ギザルニ斯ク著シキ効アルヲ況テ數年ヲ經ルニ於テハ其ガ効モ亦是レニ幾倍ヲ加フルコト疑フベウモ侍ラズ亦一ツニハ是迄常ニ心ニ憂トナシ侍ルハ髪結ブ事ニテダマ〳〵知ル友ノ誘フ有リテ或方へ行カントスルニハ何時モ前方ヨリ賴ミ置クナルモ必ズ約束ノ時間ニハ參ラズ故ニ折角約シツルトモ髪ノ爲メ徒ニ交際ヲ欠ク事有リヌルヲ如何ニ心苦シク思居リ侍リシナリ乍去是ハ全ク髪結婦ノ罪デフコトナク謂バ已ガ身ノ上ヲ人ニ任カスルヨリノ差支ニ侍ルナリ其ノ他衣襟半懸ナドノ穢ル、ノ憂モナク常ニ心爽々トシテ是ゾ天然ノ快樂ヲ全フセシト云フナンメリ然レド束ネ髪ハ形ノ見苦ナド云ヒモテツトフ人有ルモ是ハ未ダ見慣ナキ故ニテ少シク見習ルレバ決而見苦シウハ侍ラズ其ガ例ニハ束ネ始メツル頃ハ色々ト誹リヌル者モ今ハ絶テ其ガ噂無キニテモ稍慣レタルナリト知ラル、ヅカシ然レバ多クノ人ノ中ニハ我レハ体モ健カナレバ養生ナドニモ關ナシ家ニハ餘ルノ財産有レバ節儉ニモ及バズ人ト交際モ無ケレバ其レニモ思ナシト思ヒヌル人モ有リツランガ今ヨリ五十年前頃ノ女ハ兎モ角今ヤ日ニ日ニ開ケ行世ニ生立ヌルカラハ其時ニ想應ナル思付ナクテハ叶フマジ其事タルヤ後ニハ西ノ洋人ノ侮ヲ受ケ前ニハ同ジ日ノ本ノ男ニモ女子ハ無氣力ナリ卑屈ナリナド誹リ輕シメラル、ハ如何ニクヤシク侍ラズヤ然レド今束ネ髪ニ改メヌルトモ西ノ洋人ノ侮リヲ免ル、譯ニモ至ルマジ亦男子ヨリノ誹リヲ防グ譯ケニモ至ルマジ左レバ今迄通リ結ビ居ルモ差支ナシト思賜フヤモ知レザレド是ハ決テ左ナキナラン諺ニモ高キニ昇ルニハ必ズ低ヨリストカヤウナル大ナル事ヲナシツルモ亦小サキ事ヨリナシ始メヌルコソ理ト思ヒ侍リヌ況テ是後ハ遠カラデ外人ト雜居ノ行レヌルトシ聞侍レバ其時我ガ日ノ本人モ彼ノ樣ヲ取リ衣居迄モ彼ヲ習フ時有リトナレバ男子ノ散髪ト同ジク是ノ束ネ髪モ大ナル助トハナリツラント思侍ルニナン乍去右ニ述ベツル如キハ三歳四歳ノ乙女子ニモ既ニ知リ賜ヘヌル事ニテイトモ耻シウハ侍レドモ是ハ唯妾束ネ髪ノ如何ナルヤヲ試ミツル上其ガ著キ効有リテフ事ヲ世ノ姉妹ニ告ゲ參ラセント欲スルナリ然レド怪ミヌルハ一度束ネ髪ニ改メツル人ノ亦再ビ不便窮屈ナル島田圓髷ニ復セシ御人ノ有ルガ如シ是レ如何ナル思召ノ有ルニヤ其ガ御心ノ內解ニ苦シミ侍リヌ未ダ島田圓髷ヲ不便窮屈ト思賜ハヌニヤ束ネ髪ハ手易ク爽カナルヲ悟リ賜ハヌカ或ハ便利ヤ

養生ノ外ニシテ徒ニ世ノアダ口ニ迷フテノ故ナレバ是レヅ無氣力ト誹ラル丶モ理ト思侍ルナリ不知如何ナル思召ナルヤ謹デ御教チ願フニナン

●問答

○香の物の答（九）香物ハ漬干より出でたる物なり漬干ハ薫物の中へ鹿木を薄く片ぎ三四分の大さにして漬け浸し其香氣を移して之を燒くを云ふなり之に甜き瓜茄子大根等の野菜を糟粕に藏し其好味を移して茶菓子に用ふ合せ香に漬けたるより起る故に合香とも云ふ慈照院殿の頃に起りて茶の湯等よ專ら用ひしと云ふ（下野師範校。渡邊へい）

○因よ云　秋齋の筆記せしものに香の物ハ生大根よ限るなり美食のうへかならぜ食すべし口中の嗅氣をさくる爲なり生大根近世の樣よ常よあきゆへ東山殿より漬擯なりと云ま尤のやう思ひ侍りし云々嗚呼矣草よ見ゆ又た澤菴漬と云ハ大根よかぎれり菊岡氏の世事談といへるものに和尙の製し初られしといへど左にわらぜとぞ澤菴和尙ハ但州の產にして名を宗彭又ハ冥之と稱す東海寺の開祖なり正保二年九月圓寂せらる墓ハ一箇の圓石のみなり其石巽やうにして大根の香の物に似たり故に澤菴漬と香の物の渾名なり和尙ハ只だ近世の人ありて香の物ハ古くあるべし世事談の說のおときハ贔負の引だをしと云ふべしと是亦た同書中に見ゆたれバ玆に抜載すと云ふ

廣告

東京大學總理事務取扱文學部長從五位外山正一君序
日本傍聽筆記學會創立員速記法研究會員林茂淳君著

○速記學大要　全壹册（既刻）
正價郵稅共廿四錢

米國女學士ボァン氏曰く速記術ハ女子に最も適切なる學術也何となれバ女子ハ男子に比すれバ事に綿密なる性質を有それバ也と。されバにや西洋諸國に於て女子の速記術を學ぶ者日を逐て增すとなれバ我邦に於ても先覺の女學生諸君ハ宜く今日に當りて速記術を學び玉ふべし。此書ハ著者が世人の注意を惹き起さむが爲め著述されしものにて速記術の起原字体効用習熟の法西洋諸國に於て速記術の盛に行はるゝ現况我邦從來の筆記法の極めて不完全なりしと漢字も假字も書き取りと爲すに不便なると其他速記術に關せる百般の事項を平易簡明に記述せしものにて月參看に便せむ爲め辻新次矢野文雄末廣重恭二君が此學術に關して記述されし文章をも附載せるもの也。計ふ諸君の速熟讀玩味せられて速記術の効用の至大なるを覺り玉はむことを

發兌所　東京日本橋區馬喰町二丁目壹番地　輿文社
賣捌所　東京本鄕區本鄕弓町一丁目廿番地　女學雜誌社

佛國女學士路易達爾克原著伊藤重固君譯
東京大學敎授櫻井省三君閱山成哲造君校

○西洋東髮秘傳附化粧秘傳　全壹册美本　密書廿七入
定價六拾錢郵稅共六拾四錢

此書は西洋に名高き佛國風の東髮及化粧の秘法を示すものにて種々の東髮と自身に爲得る法を說明し其他髮の擦淸法を數多傳授せり又化粧術も我國にて思付ざる奇術多し御購讀の上御試驗あらんことを乞ふ

大賣捌所　東京神田雉子町　團々社支店
賣捌所　東京本鄕弓町壹丁目　女學雜誌社

○米國女敎師ダツレー氏著　育幼草　全
定價郵稅共金三拾五錢

右はダツレー氏が多年日本に在留して我國の敎育を硏究し幼兒育養法を考定せられて著はされたる必須の良書なれバ兒女を敎養せらるゝ父母は必ぜ一讀して至益あるを知り玉へ

東京本鄕弓町一丁目廿番地　女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

演說著作 材料新誌（第一号）二月十五日發兌

一冊定價十錢
全國無遞送料

凡そ演說し著作せんとする文人論客の材料となるべき者を東西古今の著作新誌中より抄錄したる者なれバ奇事、偉行、對表、等と収めたる學海珠玉の欄あり西洋支那印度日本の學者偉人の卓言高論を抄出したる文橙一枝の欄あり一讀して腦を盪かす如き名章華言を東西の小說、物語、雜書、中より抄出したる華言妙句の欄あり聖人、賢者、英雄、學士、大將、貞女、烈婦、等の德行偉事を記したる人事瑣談の欄あり近頃出刊せられたる東西の新聞雜誌中より后來の材料となり記臆を要する如き有益なる報告を収めたる雜錄叢話の欄あり凡そ文人論客が演說著作に必要なる材料ハ悉く收めて專ら文橙の益を謀る希くは諸君一讀して編者の苦辛を察し玉ハんことを●見本を要するものハ郵劵十錢を送致さるべし直に郵送仕るべき也

本鄕弓町一丁目二十番地　女學雜誌社

●右雜誌一冊定價十錢。六冊即ち半年分前金五十五錢。十二冊即ち一年分前金一圓十錢

故事詳解　全一冊

小牧櫻泉先生序
藤野海南先生序　松村南涯先生著

詩文用材

定價郵稅共廿四錢
郵劵代用不苦

●詩ヲ賦シ文ヲ作ルニハ典故ヲ解セザルベカラザルハ固ヨリ言ヲ竢タズ然ルニ世ニ典故ヲ解釋スルノ書甚ダ少ク一二之アルモ粗漏杜撰槪ヲ看ルニ足ラズ此書ハ南涯先生多年六經百家ノ書ニ就テ典故ヲ剔抉之ヲ乾坤時候等ノ部門ニ分チテ一々解釋ヲ施シタレバ典故ヲ搜索セント欲スル者ハ一タビ卷ヲ繙カバ地ニ俯シテ芥ヲ拾フヨリモ易カラン矣實ニ文人韻士座右一日モ欠クベカラザルノ珍書ナリ

發兌書肆　東京馬喰町二丁目　石川治兵衛

●東京輿論新誌　第二百二十五號　二月十日發兌

（社說）地方制度ノ改革第一、地方官選任ノ事（論說）內閣總理大臣ノ兼職、北海道ノ設置ヲ論ジ倂セテ開拓ノ新策ヲ講ズ、民間ノ士ヲ議官ニ登用スルノ風說（雜錄）薩摩芋ト長芋トノ軋轢（雜報）三島氏ノ警視總監ニ任セラレタル以來ノ出來事其他時事要報數件（一冊定價金五錢）

東京京橋區元數寄屋町二丁目十番地　嚶鳴社

社告

●本社ハ前金御拂込なき間ハ雜誌發送不仕候間御注文の節ハ必ず代價郵稅共御送付可被下候●郵便切手代用ハ堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割增にて御送金可被下候●爲替ハ東京本鄕郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便と以て御送金の節ハ通運賃ハ勿論同會社より弊社への配達料（壹錢）とも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節ハ作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表（府內無遞送料）

每月五の日發

一冊	正價金四錢	郵稅一錢	合計　現金五錢
十冊	前金卅八錢	同　十錢	合計　前金四十八錢
廿冊	同　七十錢	同　廿錢	合計　前金九十錢
卅冊	同　壹圓	同　卅錢	合計　前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回揭出	但廿八字詰	前金五錢
同　三回以上	同	一割引
同　六回以上	同	二割引

女學雜誌賣捌所

（大賣捌）東京神田區淡路町	巖々堂
東京神田區雉子町	團々社支店
同　日本橋區新葭町	眞明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同　京橋區木挽町壹丁目	萬字堂
同　京橋區銀座二丁目	山口福松
同　本鄕區元富士町	盛春堂
同　本鄕區春木町二丁目	解明堂
同　牛込區肴町	活神堂
越後國長岡	大橋書房
大坂備後町四丁目	岡島支店
（支局）東京芝西久保櫻川町	萬春堂

發行所

本局　東京本鄕區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

持主兼印刷人　瀧田正義

編輯人　近藤賢三

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

す付價郵稅其御送付[illegible]

古今の著作新誌中より抄錄したる者あれば奇事偉行、對表、等と收めたる學海珠玉の欄あり西洋支那印度日本の學者偉人の卓言高論を抄出したる文檻一枝の欄あり一讀して腦を蕩かす如き名章華言を東西の小說、物語、雜書、中より抄出したる華言妙句の欄あり聖人、賢者、英雄、學士、大將、貞女、烈婦、等の德行偉事と記したる人事瑣談の欄あり近頃出刊せられたる東西の新聞雜誌中より后來の材料となり記臆を要する如き有益なる報告を收めたる雜錄叢話の欄あり凡ろ文人論客が演說著作に必要なる材料は悉く收めて專ら文檻の益を謀る希くは諸君一讀して編者の苦辛を察し玉はんことを●見本を要するものは郵劵十錢を送致そるべし直に郵送仕るべき也

本鄉弓町一丁目二十番地　女學雜誌社

●右雜誌一册定價十錢。六册即ち半年分前金五十五錢。十二册即ち一年分前金一圓十錢

小牧櫻泉先生序
藤野海南先生序　松村南涯先生著

詩文用材 故事詳解

全一冊　定價郵稅共廿四錢　郵劵代用不苦

詩ヲ賦シ文ヲ作ルニハ典故ヲ解セザルベカラザルハ固ヨリ言ヲ俟タズ然ルニ世ニ典故ヲ解釋スルノ書甚ダ少ク一二之アルモ粗漏杜撰概ヲ看ルニ足ラズ此書ハ南涯先生多年六經百家ノ書ニ就テ典故ヲ剔抉之ヲ乾坤時候等ノ部門ニ分チテ一々解釋ヲ施シタレバ典故ヲ搜索セント欲スル者ハ一タビ卷ヲ繙カバ地ニ俯シテ芥ヲ拾フヨリモ易カラン矣實ニ文人韻士座右一日モ欠クベカラザルノ珍書ナリ

發兌書肆　東京馬喰町二丁目　石川治兵衛

東京輿論新誌

第二百二十五號　二月十日發兌

(社說)地方制度ノ改革第一、地方官選任ノ事(論說)內閣總理大臣ノ兼職、北海道ノ設置ヲ論ジ併セテ開拓ノ新策ヲ講ズ、民間ノ士ヲ議官ニ登用スルノ風說(雜錄)薩摩芋ト長芋トノ軋轢(雜報)三島氏ノ警視總監ニ任セラレタル以來ノ出來事其他時事要報數件

(一冊定價金五錢)

東京京橋區元數寄屋町二丁目十番地　嚶鳴社

候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割增にて御送金可被下候●爲替ゟ東京本鄉郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便と以て御送金の節は通運賃は勿論同會社より弊社への配達料(壹錢)とも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

毎月五の日發

女學雜誌代價郵稅表(府內無遞送料)

一冊	正價金四錢	郵稅一錢	合計 現金五錢
十冊	前金卅八錢	同 十錢	合計 前金四十八錢
廿冊	同 七十錢	同 廿錢	合計 前金九十錢
卅冊	同 壹圓	同 卅錢	合計 前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回揭出	但廿八字詰	前金五錢
同 三回以上	同	一割引
同 六回以上	同	二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町 (大賣捌) 巖々堂
東京神田區雉子町 團々社支店
同 日本橋區新葭町 良明堂
同 日本橋區馬喰町二丁目 自由堂
同 京橋區木挽町壹丁目 萬字堂
同 京橋區銀座二丁目 山日福松
同 本鄉區元富士町 盛春堂
同 本鄉區春木町二丁目 解明堂
同 牛込區肴町 活神堂
越後國長岡 大橋書房
大坂備後町四丁目 岡島支店
東京芝西久保櫻川町 (支局) 萬春堂

發行所　本局　東京本鄉區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社
持主兼印刷人　瀧田正義
編輯人　近藤賢三

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY